

エミール・ゾラとメダンの家

演出された「文豪の私邸」

福田（寺嶋） 美雪

はじめに

エミール・ゾラ（1840-1902）は、後半生をパリ西郊のセヌ川沿いにあるメダンの家で過ごした。ゾラと5人の若手作家による短編集『メダンの夕べ』（1880）によって、自然主義グループとメダンという土地の名は不可分のものとして文学史上に刻まれる。1902年に作家がパリの自宅で不慮の死を遂げた翌年からは、毎年10月第1日曜日に有志による「メダン詣で」（le pèlerinage de Médan）の集いが始まり、現在は「エミール・ゾラ友の文学会」に引き継がれている。かつてフランス国鉄は、年に1度その日だけ、最寄りのヴィレンヌ＝シュル＝セヌ駅ではなく、メダンのゾラ邸の前で列車を停めていた¹。

日記や自伝を残さなかったゾラのメダンでの私生活は、遺族や友人による回想録²や、研究者による伝記を通して徐々に明らかになった³。アマチュア写真家であったゾラ自身が、晩年に日常風景を撮影していたことも手伝い、メダンの家は他の作家と比べても当時の資料が豊富な文学記念館である。

しかし21世紀に入ると、メダンのゾラ邸は単に一作家の文学記念館というだけではなく、新たな役割を担うようになる。2006年のドレフュス大尉復権100周年、そして2009年のゾラのパンテオン入り100周年を機に、第三共和制に大きな政治的、社会的影響を与えたドレフュス事件を記憶するモニュメントのひとつとなったのだ。ゾラが来客のために建てた離れは「ドレフュス記念館」に改装されている。2009年には映画監督クロード・ランズマンが、

¹ 「メダン詣で」における記念講演は、自然主義文学研究誌『カイエ・ナチュラリスト』に必ず掲載され、ゾラを受容と研究の進展を示す重要な資料ともなっている。

² たとえば、1889年生まれの長女ドゥニーズ・ル・ブロン＝ゾラや、1890年代にゾラの作品を舞台化した音楽家アルフレッド・ブリュノーの回想録が挙げられる。Denise Le Blond-Zola, *Émile Zola raconté par sa fille*, Fasquelle, 1931. (Rééd. Grasset, 2000.) Alfred Bruneau, *À l'ombre d'un grand cœur*, Paris-Genève, « ressources », 1980.

³ 『ルーゴン＝マッカール叢書』のプレイヤー版の編者アンリ・ミットランは、3巻にわたる伝記の著者でもある。Henri Mitterand, *Zola*, Fayard, 3 vol. 1999-2002.

そして 2016 年には当時の共和国大統領フランソワ・オランドが、ドレフュス事件における『私は告発する』の功績を改めて称えた。

2014 年にサザビーのオークションで、セザンヌからゾラに宛てた 1887 年付の書簡が発表されると、メダンの家は作家と画家の緊密な結びつきを改めて喚起する地にもなった。2016 年に公開されたダニエル・トンプソン監督の映画『セザンヌと過ごした時間』«*Cézanne et Moi*» では、ロケに使われている。書齋で執筆する作家、庭でスケッチや舟遊びに興じる画家たち、親密な夜会で交わされる芸術談義などのシーンは、1880 年代のゾラの私生活を再構築したものだ。アラン・パジェスは、メダンをめぐる「神話」を解き明かし、「自然主義」の文学運動の実態を詳らかにすることを試みている⁴。

本稿では、ゾラ自身が「メダンの家」にどのような役割を与えようとしたのかを、1870 年代から 80 年代にかけての芸術家や作家たちとの交友関係から考える。「自立した文学者」のモデルとして自然主義グループを率いようと望んだゾラが、どのようにメダンの空間を演出したのかを、いくつかの伝記的事実から読み解いてみたい。そして、『ルーゴン=マッカール叢書』の小説世界と連結する文学的空間が、演劇や写真など、文学の枠を超えた創造活動へと開かれていったのはなぜかも併せて検討していく。

I. パリからメダンへ

1. 1) 若きゾラのパリ時代：左岸から右岸へ

自他共に認める自然主義グループの代表的存在としてメダンの家に落ち着くまで、ゾラはパリを転々とする生活を送っていた。1860 年代から 70 年代にかけてのジャーナリスト時代に培った交友関係をたどると、徐々にサンラザール駅のある 9 区に惹きつけられ、やがて鉄道の線路とセーヌの流れをたどるように必然的にメダンに落ち着いたことがわかる。簡単にその前半生を、暮らした土地とともに振り返っておこう。

ゾラは 1858 年に、故郷のエクス=アン=プロヴァンスから、母エミリーと二人でパリに上京した。困窮する家計を支えるため、祖父宅に身を寄せてバカロレアの準備をするが、失敗して大学進学を断念する。その後は左岸の 5 区を生活の拠点として、最初はドックの事務員、ついでアシェット書店の発送係、そしてジャーナリストとして病気がちの母を養った。パリでの最初の

⁴ Alain Pagès, *Zola et le groupe de Médan. Histoire d'un cercle littéraire*, Perrin, 2014.

数年間、ゾラはおそらく経済的な理由からほとんど数か月ごとに転居している⁵。アパートマンの最上階にある、一番安い部屋を借りることもしばしばで、所持品の少ない質素な生活であったことがわかる。故郷の学友ポール・セザンヌやバティスタン・バーユに宛てた青年期の手紙からは、サン=ジャック通りやスフロ通りの屋根裏から街の光景を見渡したり、隣人の暮らしぶりを観察したりすることが数少ない気晴らしだったことが窺える。これらの経験は、駆け出しのジャーナリストとして時評欄で手がけた「パリ・スケッチ」や、初期の小説作品、たとえば『クロードの告白』（1865）や『マドレーヌ・フェラ』（1866）、『ある死女の誓い』（1867）などに活かされている。

ゾラはペニー本で生計を立てると自身に誓い、またジャーナリズムの世界では悪名が無名に勝ることを意識していた。そして、「レヴェヌマン」紙に掲載された1866年のサロンにおけるマネ評や、評論集『私の憎悪するもの』などの挑発的な批評記事で知名度を上げる。この頃ゾラは、パリに上京してきたセザンヌとともに、エドゥアール・マネやフレデリック・バジール、オーギュスト・ルノワール、クロード・モネらがアトリエを構える、右岸のバティニョール地区に足しげく通うようになった。そして1867年からは、画家たちのモデルをしていたアレクサンドリーヌ（本名ガブリエル・メレ）と、クリシー広場の近くで同棲を始める。

サン=ラザール駅近くのカフェ・ゲルボワに、マネを師と仰ぐバティニョール派の画家たちが集い、印象派が形成されたのは周知の通りだ。ゾラもこのグループに加わって芸術談義を交わし、反アカデミズムおよび反ロマン主義の姿勢、そして現代生活の描写とありのままの自然観察を柱とする自然主義のヴィジョンを鮮明にしていった。9区のラ・コンダミーヌ通り14番地には、1869年春から普仏戦争でマルセイユに疎開するまで住んだ⁶。パリに帰還して『ルーゴン=マッカール叢書』の刊行を始めてからも、1877年に第7巻『居酒屋』で大成功を収めるまで、通算10年間はバティニョール地区に住んだことになる。この間には、ギュスターヴ・カイユボットが《ヨーロッパ橋》（1876）を、またモネが《サン=ラザール駅》の連作（1877）を仕上げている。鉄道や汽車は、オスマン大改造によって出現した「モダン・パリ」の象徴であり、パリ郊外の田園風景へと芸術家を誘う旅路への入り口でもあ

⁵ ゾラがパリで借りた住居や間取り、家賃などは、以下の研究書で可能な限り特定されている。Alain Pagès et Owen Morgan, *Guide Émile Zola, Ellipses*, 2002, pp. 110-116.

⁶ 同じ通りの9番地には、バジールとルノワールの共同アトリエがあった。バジールの《ラ・コンダミーヌ通りのアトリエ》（1870）には、バジールやモネ、ルノワールとともに、ゾラとおぼしき人物が描きこまれている。

った。美術批評に熱を注いだ 1860 年代から 70 年代半ばのゾラにとって、サン＝ラザール駅周辺は、絶えず創作意欲を刺激する地区だったのである。しかし、せわしないパリの生活に疲れ始めたゾラとその母は、故郷エクス＝アン＝プロヴァンスの自然豊かな水辺の土地で暮らすという夢を、静かに温めていた。

1.2) サン＝ラザール駅からメダンへ

1860 年代末から、ゾラはかねてより尊敬の念を公言していたギュスターヴ・フローベール、そしてエドモン・ド・ゴンクールと親交を結んだ。青年期に愛読した『ボヴァリー夫人』（1857）や『ジェルミニ・ラセルトゥー』（1865）の著者との交流は、ゾラが文芸評論で彼らの作品を取り上げ、また自著を送ったことから実現したものだ。クロワッセに隠棲するフローベールが、パリ 8 区のアパートマンに滞在するたびに、ゾラは欠かさず「日曜日」に参加した。ゴンクールの『日記』にも、1869 年 12 月 14 日になされた「私たちの賞賛者であり弟子のゾラ」との初めての対面以来、たびたび神経質な青年ゾラが登場するようになる⁷。フローベール、ゴンクール、ドーデ、トゥルゲーネフにゾラが加わった夕食を、彼らは自負と一抹の皮肉をこめて「5 人の夕食会」、あるいは「野次られた作家たちの夕食会」と呼んだ。

ゾラの文筆活動の転機は、美術批評から自然主義文学キャンペーンに重心を移した 1870 年代後半に見出せる。この頃、新聞連載と単行本の印税によって、ゾラの家は金銭的な苦勞をようやく免れた。1877 年 7 月には、出版業者ジョルジュ・シャルパンティエと、『ルーゴン＝マッカーール叢書』刊行の専属契約を結んでいる。1878 年頃、ゾラはセヌ川沿いに物件を探し始める⁸。ちょうど第 3 回パリ万博を取材中だったことも手伝い、静謐な環境に加えてパリとの往復に便利なことも条件となった。セザンヌと親しい画家アントワ

⁷ 「彼は私たちに生活の苦勞や望み、必要などを語った。ある出版業者が彼と 6 年で 3 万フランの契約を結び、毎年 6 千フラン払うそうだ。それは彼と母親のパンとなり、また 10 巻の小説から成る「ある一族の物語」を書く権利となるのだ。」Edmond et Jules de Goncourt, *Journal. Mémoires de la vie littéraire, texte intégral établi et annoté par Robert Ricatte, Robert Laffont, t. II, 2004, p. 186.* この出版業者とは、ゾラが『ルーゴン＝マッカーール叢書』のプランを提出したアルベール・ラクローワを指す。しかし最初の 2 巻を刊行したところでラクローワは破産し、既刊と続刊すべての出版権をシャルパンティエが買い取ることになる。

⁸ 1872 年に結んだ最初の契約よりも印税の配分がゾラに有利となり、重版や外国での翻訳を前提とした好待遇であった。ジョルジュ・シャルパンティエとの契約の詳細については、コレット・ベッケルの『エミール・ゾラ事典』の「Contrat」の項を参照されたい。Colette Becker, *Dictionnaire d'Émile Zola, Robert Laffont, 1993, pp. 90-91.*

ーヌ・ギユメ（1843-1918）の紹介で、ゾラはある未亡人がメダンに所有する小さな家と出会う。窓からは庭が一望でき、敷地の先を、サン＝ラザール駅からル・アーヴルへと向かう鉄道の線路が横切っていた。また、セーヌの水辺までわずか 150 メートルという好立地で、舟で小島に渡ることもできた。

1878 年 5 月 28 日にゾラは売買契約にサインし、7 月には新しい生活を始める。1878 年 8 月 9 日のフローベール宛の手紙で、ゾラはメダンへの引っ越しを簡単に報告している。「文学がこの田舎のつましい隠れ家を支払ってくれました。この家の利点は、駅から離れ、近隣に一人のブルジョワもいないことです⁹。」注目したいのは、「文学が支払ってくれた」という表現である。『居酒屋』の印税で購入し、のちに『ナナ』や『ジェルミナル』の成功によって増改築されてゆくメダンの家は、まさしく「文学」が支払った、ゾラの経済的自立の記念碑となるものであった。

メダンに転居後、ゾラはすぐに母屋に向かって右側に四角い塔を建て増し、2 階を書斎にした。室内には個人的な中世趣味が散りばめられ、聖女マドレーヌ伝説を描いた 15 世紀のスタンドグラス、プリミティブ派の三連祭壇画、武具をまとった甲冑など、古風でいかめしい飾りつけがなされた。大金をはたいて購入した巨大なルネサンス時代の暖炉には、バルザックに倣って「一行モ書カヌ日ハ一日モナシ」（*Nulla Dies Sine Linea*）という銘が彫り込まれた。そして塔の一階にはスタンドグラスがはめ込まれ、『居酒屋』の舞台版で鍛冶屋「メ・ボット」を演じた役者の肖像がデザインされた。

ゾラの執筆は、毎朝の入浴と朝食後、9 時から 13 時までの 4 時間と決まっていた。クロノメーターのように規則正しい生活リズムを刻んだのは、家の前を通過する列車の音である。広々とした書斎の調度や窓からの素晴らしい眺めは、メダンの常連だったポール・アレクシやモーパッサンが証言している。しかしモーパッサンは、ゾラの骨董収集癖には批判的で、洗練された内装のゴンクール邸と比較している。「ゾラはまったく蒐集家ではない。彼は気分が乗ると行き当たりばったり、色や形が眼を惹いたものをごちゃまぜに買い集めていた。ゴンクールのように、正統派の趣味から、出自の確かで希少価値のあるものかを気にしてはいなかった¹⁰。」

⁹ Émile Zola, lettre à Gustave Flaubert, 9 août 1878, citée par Henri Mitterand, *Autodictionnaire Zola*, « Médan », Éditions Omnibus, 2012, p. 403.

¹⁰ Guy de Maupassant, « Émile Zola », *Le Gaulois*, 14 janvier 1882, p. 1.

1882年には、シャルパンティエ夫妻を始めとする客人が滞在するための離れを建てた。庭には、家畜小屋、農場、温室などが次々と造られた。そして1885年末、叢書第13巻『ジェルミナル』のもたらした印税によって、ゾラは六角形の変った塔を左側に建て増しする。モザイクを貼った床に中世の武具を飾ったビリヤード・ルーム、最新の暖房装置やガスによるモダンな照明は、建築家フランツ・ジュルダンの助言で取り入れたものだ。ビリヤード・ルームの上階には、リネン室が作られた。のちにゾラはこの塔で、1888年夏頃に妻が雇った女中のジャンヌ・ロズロと出会うことになる。

「近隣にはひとりのブルジョワもない」と言いながら、かつての貧窮と決別するかのようには、家具や調度品、雇人を増やしていくゾラの暮らしぶりは「ブルジョワ化」してゆき、ゴンクールの『日記』で再三揶揄される。またゾラは、取材や打ち合わせで毎年パリに滞在するため、1877年に住み始めた16区のブローニュ通りのアパートマンを、1889年まで借り続けた。そして同年8月27日には、サン＝ラザール駅に近く、メダンとの往復に便利なブリュッセル通り21番地の邸宅に落ち着いた¹¹。1902年9月29日、「私は告発する」の著者が一酸化炭素中毒で命を落とすのは、この家の寝室である。

II. 「メダンの夕べ」における自然主義グループの連帯

II. 1) 自由な文学グループの構想

1876年4月に新聞連載が始まり、翌年1月に刊行された『居酒屋』の商業的成功は、メダン邸購入に繋がったが、文壇におけるゾラの交友関係にも重要な変化をもたらした。1870年代半ば、ゾラが出入りを許されたフローベールやエドモン・ド・ゴンクールの家には、イヴァン・トゥルゲーネフ(1818-1883)、シャンフルーリ(1821-1889)、マキシム・デュ・カン(1822-1894)、アルフォンス・ドーデ(1840-1897)などの写実主義作家たちが集っていた。フローベールを「おやじ」(le Vieux)と慕うグループの中で、ゾラはいつまでも年長者の陰にあった。そしてゴンクールは、『居酒屋』に『ジェルヴェゼ夫人』(1869)や『娼婦エリザ』(1877)の影響を認め、『日記』の中でも、ゾラ不在の集いにおいても、たびたび剽窃家と非難するようになる。

¹¹ ブリュッセル通りの家の書斎には、マネやセザンヌによるゾラの肖像を始め、過去の文筆活動にゆかりの絵画や彫刻作品、気の向くままに買い求めたゴシックの美術品などが飾られ、中世風のメダンの書斎とはまた違う趣を呈していた。

クロワッセの館で締め切りに追われることなく創作に没頭できるフローベール、華やかな社交界でマチルド大公妃らと親交を結び、高価な美術品を蒐集するゴンクールと、不断の努力で作品を出版し続けるほか収入の道がないゾラとでは、あまりにも生活環境が異なっていた。なにより、複数の新聞連載を抱えつつ毎年1冊長編を刊行するペースを保っていたのは、「野次られた作家たちの夕食会」では、裕福な実家や相続財産を持たないゾラ一人だった。そしてゾラは、師を仰ぐ弟子としてではなく、自身が中心となって、より若々しく熱気のある文学集団を形成するという企てを温め始める¹²。

自然主義の後継者として活躍を期待する若手作家については、すでに幾人か心当たりがあった。まず、青年期から晩年まで変わらぬ友情を結び、セザンヌによるゾラの肖像画(1869)にも描かれたポール・アレクシ(1847-1901)がいた。ついで1874年頃、ゾラはフローベールの家で、ジャーナリストのギド・モーパッサン(1850-1893)と出会う。その2年後には、ジョリス=カルル・ユイスマンス(1848-1907)と親交を結び、『マルト ある娼婦の物語』(1876)や『ヴァタール姉妹』(1879)などを評価した。そのユイスマンスの紹介でゾラと知り合い、『居酒屋』が非難を浴びた時に熱烈な擁護をしたのがレオン・エニック(1850-1935)とアンリ・セアール(1851-1924)だ。彼らはいずれも1850年前後の生まれで、ゾラよりもひと世代若い。

1877年4月16日、サン=ラザール通り109番地のレストラン「シェ・トラップ」で、モーパッサンをはじめ6人の若手作家によって、フローベール、ゴンクール、そしてゾラを囲む「自然主義の集い」が開かれた¹³。『居酒屋』が文壇に呼び起こした賛否両論が冷めやらぬ時期の夕食会は、それまで緩やかな交流を保ってきた作家たちを、「自然主義」の旗印のもとに結束させた。1879年9月、ゾラが自然主義文学のマニフェストとして「ヨーロッパ通報」紙に発表した『実験小説論』は、大きな非難を浴びながらも「自然主義」と

¹² アンリ・ミットランは、『居酒屋』の成功を受けて、ゾラが「私」(je)ではなく「私たち」(nous)という主語で自然主義キャンペーンの記事を書き始めることを指摘している。「ゾラがごく曖昧に、このいわゆる「文学グループ」を想起する時、その脳裏にかなり具体的に浮かんでいたのは、自分の周りに若い世代の作家たちを連帯させることだった。あらゆるジャンルの独創的な作品を定期的に出版している彼が、年長者やモデルの役割を務める番も遠くなかった。」(Henri Mitterand, *op. cit.*, t. II, 2001, p. 285.)

¹³ 「シェ・トラップ」の夕食会に集ったのは、以下の面々だった。フローベール、ゴンクール、ゾラ、ポール・アレクシ、アンリ・セアール、モーパッサン、ユイスマンス、レオン・エニック、オクターヴ・ミルボー、そして出版業者のジョルジュ・シャルパンティエである。

いう言葉を文壇に強く印象づける。その翌年、5月8日のフローベールの死は、ゾラに大きな衝撃を与えた。しかし、「師」の逝去は、すでに美学的にも文学的にも方向性の違いが鮮明だったゴンクールの影響下から離れ、メダンを中心に、より野心的な文学サークルを開ききっかけともなった。

挑発的な作品によってつねに批判の矢面に立っていたゾラがグループを作れば、そのメンバーもまた文壇で揶揄の対象となることは避けられない。ではゾラは、どのように若手作家への指針を示そうとしたのか。その答えは、1880年7月に「ヴォルテール」紙に連載され、のちに批評集『実験小説論』に収録された「文学における金銭」から読みとれる¹⁴。ゾラはこの記事で、文学アカデミーの権威の陰りを指摘しながら、19世紀前半に文壇に大きな影響力を持っていた、文学サロンやセナークルの消滅をも断言している¹⁵。

この文学サロンの消滅は重大な事実である。なぜならそれは趣味嗜好の拡散、読者の絶えざる増加と広がりを示しているからだ。もはや世論は、選ばれた小グループや、それぞれの神を戴くセナークルによってつくられるものではない。読者たちが形成する大衆が、彼ら自身で判断し、成功する作品を決めるのである¹⁶。

ゾラは、文学が「大衆化した」とは決して言わず、読者層の拡大によって「大衆の手にわたった」として、閉鎖的なアカデミーやセナークルの基準から自由な作品こそが現代の文学だと主張する。そしてデュマ・フィスやヴィクトリアン・サルドーなど、演劇で莫大な財を成した作家に比べれば、小説家の報酬は低いことを認めたくえで、ユゴーの『ノートル=ダム・ド・パリ』（1831）やウジェーヌ・シューの『パリの秘密』（1843）などの新聞連載小説を成功例として挙げる。しかし、商業的に初めて大成功した『居酒屋』に

¹⁴ 『実験小説論』には、表題の論文のほか、「青年への手紙」、「演劇における自然主義」、「文学における金銭」、「共和国と文学」が含まれる。いずれの記事でもゾラは、既存のブルジョワ社会を痛烈に批判しつつ、科学的な観察に裏打ちされた「民主的な」文学を志向している。

¹⁵ 復古王政期から七月王政期にかけては、作家自身、あるいは俳優が朗読する詩や戯曲を社交界の人々が聴くことで、文学作品の評価がなされていた。シャトーブリアンやコンスタン、ユゴーはロマン派のサロンやセナークルの中で名声を獲得し、カノンの中に位置づけられたのだ。ロマン主義時代における文学受容のあり方については、以下を参照されたい。アンヌ・マルタン=フュジェ『優雅な生活〈トゥ=パリ〉、パリ社交集団の成立 1815-1848』、前田祝一監訳、前田清子・八木淳・八木明美・矢野道子訳、新評論社、2001年、336-343頁。

¹⁶ Émile Zola, « L'Argent dans la littérature », *Le Roman expérimental*, présentation par François-Marie Mourand, Garnier-Flammarion, 2006, p. 190.

言及しないまでも、大衆に選ばれて正当な報酬を得た作品であるという自負を抱いていたことは論の主旨からも明らかだ。つまりゾラは、文壇や出版界、ゴンクールサークル内にさえ漂う、『居酒屋』がもたらした収入への羨望や嫉妬を、暗に牽制しているようにも読める。

今日われわれに威厳を与え、尊敬に値する存在たらしめるのは何か。金銭である。[...] ところでこの威厳、この尊敬、この広がり、自らの人格と思想の肯定を、作家は何に負っているだろうか。疑いようもなく、金銭にである。金銭、つまり作品によって正当に得られた収入が、あらゆる屈辱的な庇護から作家を解放し、いにしへの宮廷つき芸人や控えの間の道化を、自由な市民、すなわち己自身のみにより頼む人間へと変えたのである。金銭があればこそ、作家はパンを失う恐れなしに、すべてを言うことができ、すべてを、国王や神さえも、批判検討の対象にできたのだ。金銭が作家を解放し、金銭が現代の文学を生み出したのである¹⁷。

ゾラが主張する、作家が印税によって経済的自立を獲得し、思想と表現の自由を手に入れるという修行の過程は、財力に恵まれたフローベールやゴンクールには当てはまらない。金銭によって「あらゆる屈辱的な庇護」から解放され、「文学が支払ってくれた」メダンの家を手に入れたのは、ほかならぬゾラである。したがってこのくだりは、「シェ・トラップ」の夕食会を企画した後輩たちへの、個人的な励ましでもあると読むことができる。ゾラは、若手作家がジャーナリズムの世界で生計を立てることは、才能の浪費ではなく、根気強く労働する習慣を形づくると肯定する。そして、自分が「一行モ書カヌ日ハ一日モナシ」を実践するように、たゆみない努力の対価として堂々と報酬を受け取ることを奨励している。のちに、ドレフュス事件に際して「私は告発する」を発表し、1898年2月に法廷に立たされた時、ゾラが陪審団に宣言したのも、この一作家としての言論の自由であった¹⁸。

¹⁷ *Ibid.*, p. 192.

¹⁸ 「私は、人生を著作に捧げてきた一介の自由な物書きであります。明日にでも自分の本来の持ち場に戻り、中断された仕事にふたたび取りかかりたいと思っている、ひとりの作家であります。[...] 百歩譲って私がフランス人ではないとしましょう。その場合、私がフランス語で書き、世界中に何百万部と行きわたらせた40冊の本は、私をフランスの栄光に与るところのあった一人のフランス人とみなすために、まだ不十分であると言うのでしょうか。」(Émile Zola, « Déclaration au Jury », *L'Aurore*, 22 février 1898, *L'Affaire Dreyfus. « J'accuse...! » et autres textes* (éd. Henri Mitterrand), Le Livre de Poche, 2010, pp. 160-161.)

親の望んだ道を放棄して文学を選んだアレクシヤエニック、カルナヴァレ博物館の司書でもあったセアール、官吏として役所に勤務したモーパッサンとユイスマンス、彼らはいずれもゾラと同様に、実家の資産やアカデミーの後ろ盾を持たず、苦勞しながら文筆活動が続けていた。ゆえにゾラは、閉じた師弟関係によって「流派」(école)を築くのではなく、より平等で開放的な「グループ」を志した。その脳裏には、カフェ・ゲルボワの画家たちが、サロンの權威にひれ伏すことなく対等な同志として、1874年から開催している印象派グループ展があったのではないだろうか。1878年に相続した遺産で画家仲間の作品を購入し、経済的な支援を惜しまなかったカイユボットの存在、あるいは自由で民主的なグループ展を志して「芸術家の共同出資会社」の規約を作ったピサロやモネの活動は、ゾラも知るところであった。アカデミーの權威に依らない芸術家の経済的自立と、創造活動における連帯が、1880年前後におけるゾラの主要な問題関心であったことは間違いない。

II. 2) 『メダンの夕べ』の戦略と誤算

メダンの家が自然主義グループの象徴となったのは、1880年頃から5年間ほどのことである。ゾラは左岸にいた青年時代から、毎週木曜日に親しい友人を自宅に招く習慣が続けていた。メダンに転居した後も、芸術家仲間を妻の手料理でもてなす「木曜会」は、「メダンの夕べ」と名前を変えて継続された。ゾラはおそらく、長編刊行のたびに外観や内装が変化する邸宅が、若手への刺激や励ましになることを望んだが、モーパッサンやユイスマンスは、ブルジョワ化してゆく夫妻の暮らしをある程度冷静に捉えていた。また、パリから鉄道ですぐとはいえず、駅から徒歩で半時間かかるメダンの家との定期的な往復は、後輩たちの「忠実さ」が試される習慣だったことは否めない。

1879年末のこと、「メダンの夕べ」の常連5人で短編を持ち寄り、ゾラの名を冠して出版することを思いついたのは、レオン・エニックだった。ゾラは短編集のコンセプトに、10年の時を隔てて批判的に普仏戦争を描いた「戦争文学アンソロジー」を提案する。『ルーゴン=マッカール叢書』で試みている、第二帝政期の批判的考察という視点の応用である。当時はナショナリズムの高まりから、アルフォンス・ドーデの『最後の授業』(1873)のように、愛国心をあおる小説が盛んに書かれていたが、フランス軍とプロシア軍をステレオタイプな善悪にわけて描かないという了解が交わされた。ゾラ自身はすでに、1877年7月の「ヨーロッパ通報」に発表した『水車小屋攻撃』の原稿を持っていた。当初は『喜劇的な侵略』*L'Invasion comique* という仮題

がつけられていたが、メダンのゾラ邸に集う若手作家による自然主義の文学宣言、という宣伝効果を考え、よりシンプルな『メダンの夕べ』が選ばれた¹⁹。

1880年4月14日、シャルパンティエ社から『メダンの夕べ』が出版された。収録作品は、ゾラの『水車小屋攻撃』、モーパッサンの『脂肪のかたまり』、ユイスマンスの『背囊を背負って』、セアールの『瀉血』、エニックの『グラン・セットの事件』、そしてアレクシの『戦闘の後で』である。いずれの作家も持ち味を活かして、盲目的な愛国心を諷刺しながら、戦争の愚かしさ、無意味さを暗示する作品を寄せた。しかし、従軍経験を持ちながら、戦闘や死体を一切描写することなく、娼婦のブル・ド・シュイフを通してフランス人の倫理観を痛烈に皮肉ったモーパッサンの『脂肪のかたまり』の完成度がずば抜けていることは、グループ全員の一致した見解であった²⁰。

『メダンの夕べ』発表当初、巻頭の『水車小屋攻撃』以外の短編は、さほど高く評価されなかった。しかし6人の狙い通り、「メダン」という地名は自然主義グループの牙城として知れ渡る。批評家アルベール・ヴォルフは、4月19日付の「フィガロ」紙の書評で、「ボワシーとトゥリエルの間にある小さな美しい村が、ヨーロッパの首都と同じ知名度だと言わんばかりの、うぬぼれたタイトルだ²¹」とこき下ろしている。つまり若手の5人は「ゾラの弟子」とみなされ、「自然主義作家」の肩書を背負うリスクと引き換えに、文壇における一定の知名度を得たのである。翌年には、モーパッサンの『メゾン・テリエ』、ユイスマンスの『家庭』、セアールの『ある美しき一日』などの自然主義小説が次々と発表された。そしてゾラは、1880年のフローベールと母エミリーの死の打撃も手伝い、ジャーナリズムの世界と距離を置いて、メダンの家で長編に専念し始める。

しかし「メダンの夕べ」グループの創造上の連帯は長くは続かない。モーパッサンはデビュー作で得た名声から、弟子ではなく対等の同輩として自立した立場を早々に表明した。1884年の『さかしま』発表を機に、ユイスマンスとゾラは文学上の師弟ではなくなる。元々ユイスマンスと親しかったエニックは、ゾラの『ムーレ神父のあやまち』（1875）の舞台化を試みたが完成せず、その後は戯曲の分野で活躍した。ゾラ夫妻の身の世話から長編執筆

¹⁹ Colette Becker, *op. cit.*, p. 394.

²⁰ 『脂肪のかたまり』による華々しいデビューが、モーパッサン自身によって周到に準備された戦略であったこと、彼が自然主義グループに加わるに至った経緯については、以下の著作に詳しい。足立和彦『モーパッサンの修業時代 作家が誕生するとき』、水声社、2017年、241-262頁。

²¹ Albert Wolff, « Courrier de Paris », *Le Figaro*, 19 avril 1880, p. 1.

に必要な資料の収集まで、メダンでもっとも密な関係を築いていたセアールとの決別は、より私的な理由による。1893年頃、愛人ジャンヌ・ロズロと子供たちの存在が発覚したことで、ゾラ夫妻に危機が訪れた²²。この時、二人の間で板挟みになったのが、ゾラとジャンヌの秘密の関係を仲立ちしていたセアールだった。彼は反ユダヤ主義者でもあり、ドレフェス事件に際しては完全にゾラと対立する。「メダンの夕べ」の仲間ではもっとも寡作だが、1882年にゾラの伝記を出版したアレクシひとりが、忠実な友として残った²³。

『メダンの夕べ』の作家たちが、文名を挙げるために用いたメディア戦略、すなわち文壇における世代交代の演出や、「私たち」(Nous)の多用が醸し出す連帯感は、わずかに5年後にさらに一世代下の作家たちによって反復される。1887年夏、ゾラは「ジル・ブラース」紙上で、『ルーゴン=マッカール叢書』第15巻『大地』の連載を始める。すると、8月18日の「フィガロ」紙に、小説の完結を待たずして、ゾラとほとんど面識のない若手作家が連名で「5人の宣言」を発表したのだ。その5人とは、ポール・ボヌタン(1858-1899)、ロニー兄(J. H. Rosny, 1856-1940)、リュシアン・デカーヴ(1861-1949)、ポール・マルグリット(1860-1918)、ギュスターヴ・ギッシュ(1860-1935)である。彼らは、『大地』の「許容しがたい猥褻さ」や誤った科学主義を非難し、「現実から想を得た本すべてに、おのずと結びつけられる自然主義者という肩書は、もはやわれわれにはそぐわない²⁴」と表明した。

激烈な「5人の宣言」発表の影には、毎日曜日の「屋根裏部屋の会」に彼らを迎え入れたゴンクールとドーデの存在があった²⁵。つまりメディア上で

²² ゾラとセアールの間に生じた亀裂は、ゴンクールの日記にも書き留められている。

「ドーデはセアールが例の愛人の件でゾラに冷ややかになったと話した。ゾラはメダンで、二人の子どもの母親を近所に住ませた。セアールは、美女への手紙の配達人を請け負った。[...]ある日、セアールの務める役割にいら立ったゾラ夫人は、彼がゾラの友情に寄せる信頼を嘲った[...] どういうわけか何通かの手紙を入手していたのだ。その後二人の友人の間に喧嘩が起り、仇同士のようになってしまった。」(Edmond et Jules de Goncourt, *op. cit.*, t. III, 2004, pp. 825-826.)

²³ Voir Paul Alexis, *Émile Zola. Notes d'un ami*, Charpentier, 1882.

²⁴ Paul Bonnetain, J.-H. Rosny, Lucien Descaves, Paul Margueritte, Gustave Guiches, « La Terre. À Émile Zola », *Le Figaro*, 18 août 1887, p. 1.

²⁵ ゴンクール兄弟の暮らしたオートウイユの家は、蒐集家のエドモン・美的趣味で埋め尽くされた、一種の邸宅美術館でもあった。1886年、建築家フランツ・ジュールダンに一部を改装させたエドモンは、「屋根裏部屋」(Grenier)で芸術家たちを迎え、毎日曜日にサロンを開くようになった。1890年代に入ると、この集いははっきりと、愛国主義、反ユダヤ主義的な性格を帯びようになる。エドモンは『芸術家の家』において、自邸の各部屋を飾る調度品やコレクションを克明に描写している。Edmond de Goncourt, *La Maison d'un artiste*, Charpentier, 2 vol., 1881.

展開された、メダンの主とオートウイユの主の代理戦争だったのである。1900年のアカデミー・ゴンクール設立時の会員には、ロニー兄弟、マルグリット、デカーヴなど「5人の宣言」の著者に加え、ユイスマンスやエニックなど、「メダンのタベ」から離れた作家が名前を連ねている。エニックは、アルフォンス・ドーデと共に、エドモン・ド・ゴンクールの遺言の証人ともなった。

しかしこれらの伝記的事実は、自然主義グループの決定的な終焉を示すものではない。そもそも、ゾラのみならず『メダンのタベ』の面々もゴンクールの夕食会の常連であり、自然主義の洗礼を受けた一派としての交流は依然として続いていた。「5人の宣言」の作家たちも、ゾラに著書を献呈した過去があり、知名度を得たのちは第二世代の「プティ・ナチュラリスト」とみなされた。ゾラの死後、1911年にロニー兄が、1927年にはリュシアン・デカーヴが、「メダン詣で」においてスピーチを行っている²⁶。若い世代に「仮想敵」としてその名を利用された形ではあるが、メディアの戦略的活用を教え、師弟関係や派閥の中に閉じこもらない応酬を促したという点において、ゾラは「メダンのタベ」で意図した自らの役割を、いくばくかは果たしたのである。

III. 演出された「メダンの主」の私生活

III. 1) メダンの家と小説世界の連結

1860年代から70年代、バティニョール派のアトリエや先輩作家たちの客間に入出入りしていたゾラは、1880年以降はメダンの主人として、「メダン訪問記」を書かれる立場となった。ジャーナリストの取材に応じ、友人たちと食卓を囲む日々の中で、どのように自邸の様子がパリの新聞に報じられるか、ゾラはじゅうぶんに意識していたに違いない。描写する側からされる側に回ったゾラは、メダンという空間を自身の小説作品と結びつけ、自然主義の第一人者としての自己演出をほどこそうとした²⁷。注目すべきは、ユイスマンスの『さかしま』や「5人の宣言」の発表によって、文壇における自然主義

²⁶ 2010年の『カイエ・ナチュラリスト』第84号、そして2011年の第85号には、リュシアン・デカーヴに関する研究論文や未発表書簡が収録されている。「5人の宣言」の著者たちについて連続で特集が組まれるのは初めての例である。

²⁷ 表現したいイメージを、家族と友人に囲まれて過ごす現実世界で演出するというゾラの傾向については、以下の論考で写真における実践例が分析されている。高橋愛「ゾラ『パリ』と写真をめぐる視覚体験——窓辺の記憶からたどる母子の表象」、《GALLIA》53号、大阪大学フランス語フランス文学会、2014年3月、21-30頁。

グループの立場が変化しても、ゾラは 1871 年のコンセプト通りに『ルーゴン=マッカール叢書』の刊行を年一冊続けていたことである。

執筆に際して、ゾラは毎回のように建物の見取り図や街の地図を描き、直線や交差点を引いて登場人物を配置していった。フィリップ・アモンは、ゾラが空間構築をする際に働かせる想像力の特徴を、以下のように分析している。「ゾラの登場人物は、空間配分の力に支配され、自らの空間に閉じ込められ、職業にまつわる住環境の「枠に入れられ」、あてがわれた住居を受け入れる。登場人物自らが、この住居のある場所を占め、この場所が人物を条件づけ、また人物のほうでも場所を引き受けているのだ²⁸。」この想像力を、ゾラはメダンにおける実生活にも働かせたと考えることはできないだろうか。『ルーゴン=マッカール叢書』を再読すると、メダンの家と叢書の作品世界は、ときにあからさまな、ときに暗示的な共通点をもつことがわかる。

先述した通り、『文学における金銭』において、作家が経済的に自立することの重要性を訴えたゾラは、作品で得た報酬を家の外観や内装という目に見える形で物質化させていった。1880 年と 85 年に建て増しした、通称「ナナの塔」と「ジェルミナルの塔」が、もっともわかりやすい例である。さらにゾラは、訪れる仕事相手や友人たち、つまり叢書の良き読者にならわかる符牒を、メダンの家じゅうに散りばめてゆく。パリのアパルトマンの書斎が、印象派やセザンヌの絵画など、ゾラの批評家としての活動を象徴するイメージで飾られていたことを想い起こそう。メダンの家は、「創造する文学者ゾラ」を表現するという、明確な意思のもとに拡張されていったのだ。

たとえば、1879 年にモーパッサンとエニックが、セーヌ川を漕いでメダンの岸辺に運んだボートは、連載中の小説のヒロインにちなんで、「ナナ号」と命名された。1880 年 6 月に、セーヌに浮かぶ小島を手に入れると、『ムーレ神父のあやまち』で描いた緑豊かな庭園からとって、「パラドゥー」と名づけた。食堂を飾る絵皿のセットには、『居酒屋』のさまざまな場面が描かれ、書斎のひじ掛け椅子には、『夢』（1888）に登場する架空の貴族オートクール家の紋章がデザインされた。最新式の暖房装置やガスの照明は、『ごった煮』（1882）で主人公オクターヴ・ムーレが入居するブルジョワ向けアパルトマンを思わせる。また、ビリヤード・ルームのある棟と書斎のある棟を両翼に備えた家、温室をしつらえた庭という構造は、『獲物の分け前』（1871）

²⁸ フィリップ・アモン『イマジユリー 19 世紀の文学とイメージ』、中井敦子・福田美雪・吉田典子・野村正人訳、水声社、2019 年、175 頁。

でヒロインのルネが暮らしたモンソー公園の邸宅の間取りに酷似している²⁹。メダンの地所にこもるゾラの想像領域の中で、連結し拡張する長編の作品世界は、物への名づけやイラストを介してその日常生活をも規定し始めていた。

フィクションの要素を実生活に取り入れる遊び心とは反対に、メダンでの暮らしが、未だ書かれていない小説の構想に影響を与えることもままあった。書斎の窓辺から毎日眺めた蒸気機関車や、パリとメダンの往復が、叢書第17巻『獣人』（1890）における鉄道のイメージを育んだことは言うまでもない。メダンの家と土地の売買を請け負った公証人、改修を手がけた左官や庭園を手入れした庭師なども、叢書の登場人物たちの名もなきモデルとなった。夫妻が世話をする「パドゥー」での動物たちとの暮らしは、『ジェルミナル』や『大地』に登場する家畜の描写に影響を与える³⁰。そして、1880年10月17日に2階の私室で亡くなった母親の思い出は、『生きる歓び』（1884）でシャントー夫人の病と、息子ラザールによる看取りのエピソードに読みとることができる。「永遠とも思われる2晩と1日、死が家に住みつく恐ろしい時間が流れた。[...] 階段が狭いので、棺を降ろすのはひと仕事だった³¹。」

『ルーゴン=マッカール叢書』第14巻『制作』（1886）において、ゾラは自身をモデルにした作家サンドーズの「木曜会」を描き、意図的に「メダンの夕べ」の集いを小説世界に再構築する。バティニョール地区で母の介護をしながら妻と暮らすサンドーズは、遺伝と環境の法則をもとにある一族を描く長編シリーズを発表し、赤裸々な現実描写ゆえに非難を浴びながらも、印税によって裕福になる。その文学的成功や食道楽、骨董収集癖も含めて、青年期から壮年期にかけてのゾラの人生行路そのものだ。作中では「ロンドン通り」に設定されているが、サンドーズ家の室内描写は明らかに、ブリュッセル通りとメダン、2つの家の内装を融合させたものである。

²⁹ Voir Émile Zola, « Plans de l'hôtel Saccard » pour *La Curée*, Ms. NAF. f° 270 à 273. *La Fabrique des Rougon-Macquart*, édition des dossiers préparatoires, publiée par Colette Becker avec la collaboration de Véronique Lavielle, Honoré Champion, t. I, 2003, pp. 426-427.

³⁰ 1896年の「フィガロ」紙に発表した「動物への愛」は、代替わりしながらつねに傍らに置いてきた、黒い犬のバンパンを始めとする犬や猫との日々を糧に書かれている。Émile Zola, « L'amour des bêtes », *Le Figaro*, 24 mars 1896, p. 1. Repris dans *Nouvelle campagne* [1896], Charpentier, 1897, pp. 85-97.

³¹ Émile Zola, *La Joie de vivre*, *Les Rougon-Macquart*, édition intégrale publiée sous la direction d'Armand Lanoux, études, notes et variantes établies par Henri Mitterand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1964, p. 972. 本論における『ルーゴン=マッカール叢書』の引用はこの版を出典とし、以後 *RM* と略記する。

整えられた客間には、古い家具やタピスリー、あらゆる民族と、あらゆる時代の置物がひしめいていた […]。彼は骨董品めぐりをする中で、読書を始めた思春期に芽生えたかつての欲求やロマンティックな野望を満たしていたのだ。かくしてこの猛烈な現代作家は、15歳の時に夢見たように、虫の喰った中世の雰囲気の中で暮らしているのだ。彼は笑いながら、いまどきの素敵な調度品は値が張るが、似たような色や形の骨董品にならず手が届くと言いつけていた。彼はまったく美術蒐集家ではなく、全体としてひとつの立派な効果を出そうと、装飾のために集めているのだった³²。

作中で3度描写されるサンドーズの「木曜会」は、主人公のクロードを中心とした「外光派」の画家たちの芸術観のずれを、徐々に浮き彫りにする役割を担っている。しかしその原因の一端は、クリスタルや銀の食器、燭台で食卓を飾り、給仕や料理人を雇い、高級食材を使ったフルコースを整えるようになった、サンドーズ自身の生活環境の変化にもある³³。

なんということだ！　これが子どもの頃から選り抜きの友だけで育み、年老いてもなお味わうはずだった幸福、永遠を夢見て長年抱いてきた幻想の末路なのか？　ああ、いたましい一団だ！　なんという最後の歓談、嘆かわしい結末、心の破綻だろう！　人生の途上で置き去りにした友たち、道半ばで失われた大いなる友情、いつまでも変わらないと思っていたほかの者たちの絶えまない変化に、彼は驚くばかりだった。これまでのみじめな木曜会が悲哀とともによみがえった。たくさんの思い出が喪に沈み、愛したものがゆっくりと死んでいくようだった。 […] 悲しみの奥底に、ひとつの確信が芽生えた。すべては終わり、人生には何もふたたび始まらないのだ³⁴。

『制作』第11章における「木曜会」における決定的な仲間割れの場面は、1880年代には各々別々の道を歩み始めた印象派グループに対する、ゾラの幻滅を表現したものとよく解釈される。しかし、サンドーズの「木曜会」が、「メダンのタペ」のセルフパロディであるとすれば、むしろ1880年前後に志した自然主義グループの連帯が、望む形では実現しなかったことへの諦念を表した箇所として読むことができるだろう。1887年の「5人の宣言」を待つまでもなく、メダンの家という「成功報酬」をモデルとして後輩に示し、「自然

³² Émile Zola, *L'Œuvre*, RM, t. IV, 1966, p. 323.

³³ サンドーズという人物が、どの程度までゾラ自身をモデルにしているかについては、拙論を参照されたい。寺嶋美雪「クロードとサンドーズ、二人のゾラ —— 『制作』における芸術家の告白」『仏語仏文学研究』第36号、東京大学仏語仏文学研究会、2008年、95-118頁。

³⁴ Émile Zola, *L'Œuvre*, op. cit., pp. 337-338.

主義」を旗印に掲げて若手作家を育成する道は、もはやゾラの目指すところではなくなっていたのである。

III. 2) 公の家庭と秘めた家庭：二重の私生活

ゾラの私生活は、パリとメダンの二つの拠点に分割されていたが、ブリュッセル通りの邸宅が公的な、メダンの家がより私的な活動の場と決まっていた。叢書のイメージを利用して築いた自己演出の作用が奏功して、1880年代のメダンは、さまざまな分野の芸術家を引き寄せる場へと変化した。年一回という叢書の刊行ペースを守ることは難業であり、そのためにゾラは設定に必要な助言を幾度となく専門家に求めた。たとえば、建築家のフランツ・ジュールダン(1847-1935)は、デパート小説『ボヌール・デ・ダム百貨店』(1882)や、カテドラルを舞台にした『夢』に多くの助言を与え、建物の見取り図などをデッサンして創作に協力した³⁵。

ゾラはまた、『メダンのタベ』のメンバーと文壇で「共闘」するのではなく、他分野の芸術家と自作品を翻案する、「協同」の道を探るようになる。音楽家のアルフレッド・ブリュノー(1857-1934)とは、1891年に『夢』のオペラ化を手がけ、ついで1893年に『水車小屋攻撃』の舞台化も実現させた。ブリュノーは「木曜会」について、このような証言をしている。「ゾラの木曜会は非常に閉鎖的だった。厳密に選ばれた親密な友人だけが、出席を許された。私と妻がそこに招かれたのは、ある程度の猶予、いうなれば私たちの試用期間が過ぎてからだ³⁶。」

1880年代後半は、『ルーゴン=マッカール叢書』が諸外国に翻訳され、読者層が拡大した時期にも重なる。徐々に進んだ自然主義文学の国際的な受容は、メダンの書斎から密に手紙のやり取りをした、オランダのジャーナリスト、ジャック・ファン・サンテン=コルフ(1848-1896)や、イギリスの編集者アーネスト・ヴィゼトリー(1853-1922)の尽力に負うものであった。1年の初めの3分の1はパリの邸宅で取材を受け、春から冬にかけてはメダンで執筆に専念するという生活スタイルは、国内外の読者も知るところであった。書斎にこもる『ルーゴン=マッカール叢書』の著者を包み隠し、選ばれた友人にのみ開かれるメダンの家は、ある種ミステリアスなイメージをまとい始

³⁵ ジュルダンは、前述のようにゴンクール邸の改装も担当した建築家である。ヴァリエテ座やヌヴォテ座などの劇場やサマリテヌ百貨店などを手がけた実績があり、アカデミスムに反抗してモダンな建築を志向する立場がゾラと一致していた。

³⁶ Alfred Bruncau, *op. cit.*, p. 116.

める。1880年にアルベール・ヴォルフが辛辣に予告した通り、「メダン」という土地の名は、短編集『メダンの夕べ』ではなく、『ルーゴン=マッカール叢書』と結びついて国内外の読者に広く知れ渡る。執筆を支え、草稿を保管し、来客に対応するアレクサンドリーヌも、「文豪の良き伴侶」という割り当てられた役割を忠実に果たした。しかし夫妻が演出する「メダンの家」のイメージは、ある理由から一種の虚像へと変わってしまう。

1888年末頃に始まったゾラとジャンヌ・ロズロの関係、メダン近郊のシュヴェルシュモン之家に匿われた二人の子どもの存在は、1893年に匿名の手紙によってゾラ夫人の知るところとなった。セアールやアレキシ、シャルパンティエ夫妻など、メダンのもっとも親密な客人たちは、ゾラの隠された私生活について暗黙の理解を共有していた。ゾラが読み書きを教えたジャンヌ、ドゥニーズとジャックに宛てた、平易で愛情がにじみ出る手紙の多くは、メダンの書斎でしたためられている。「私は周りの者たちすべてを幸せにしたいと夢見ていた。しかしそれは不可能だとよくわかった。そして最初に打ちのめされたのは私だ³⁷。」シュヴェルシュモン之家は、完全に私的な、長年待ち望んだ真の「家庭」でありながら、ゾラ自身は住むことの許されない場所だった。ゾラはパリとメダン、そしてシュヴェルシュモン、この3点を往還するという、かつて想像もしなかった困難で不自然な私生活を始める。

1890年頃に、ジョルジュ・シャルパンティエの手ほどきで写真撮影を始めたゾラは、すぐさまのめりこみ、1895年にはメダンの地下に写真の現像室を作った。二重生活の影さえも感じさせないメダンの平穏な日常を数多く撮影したのは、アレクサンドリーヌの親戚にあたる、若き化学者アルベール・ラボルドだった³⁸。ゾラ自身も、メダンの家や庭、家族や友人たち、動物たちにコダックのカメラを向け、親密で私的な思い出の記録として残した。

『ルーゴン=マッカール叢書』がようやく完結する1893年頃、50代のゾラは流行の自転車を手に入れて乗りこなすようになった。ブリュッセル通りの邸宅から、サン=ジェルマン・アン・レーを通過して、メダンまでの30キロを超える道のりを走破することもあった。自分の自転車を「スプレット号」と名づけ、ムーランやポントワーズまでツーリングを楽しんだようだ。

³⁷ Émile Zola, lettre à Jeanne Rozerot, 13 juillet 1894, *Lettres à Jeanne Rozerot. 1892-1902*, édition établie, présentée et annotée par Brigitte Émile-Zola et Alain Pagès, Gallimard, 2004, p.150.

³⁸ ラボルドは、アレクサンドリーヌに関する初めての伝記の著者でもある。Albert Laborde, *Trente-huit années près de Zola. La vie d'Alexandrine Zola*, Les éditeurs français réunis, 1963.

晩年のゾラを特徴づけるのは、新しい道具に挑戦し、使いこなして創作に活かそうとする姿勢である。ゾラのカメラは、妻や友人と過ごすメダンの暮らしだけではなく、公にその存在を明らかにできないジャンヌと子どもたちの姿を記録する媒体でもあった。自転車も同じく、メダンからシュヴェルシュモンまでの道のりを、人目を気にせず往復するために、必要な移動手段だった。どちらも、自ら作り上げた「文豪ゾラ」のイメージで縛りつけるメダンの家から、つかの間のエスケープを許し、自ら選んだ特殊な二重生活を成立させるために、なくてはならない道具だった。

長い時と膨大な投資によって演出された、メダンでの半ば閉ざされた家庭生活は、意に反して晩年のゾラを縛る枷となった。しかしアレクサンドリーヌは、夫の二重生活を受け入れる代わりに、時として「メダンの女主人」の役割を離れる自由を手に入れる。ゾラもまた、1891年からは、スペインやベルギー、イタリア、イギリスなどの諸外国を旅した。ひとつの完結した小世界に暮らしていたゾラ夫妻は、はからずも出現した新たな「家庭」によって、自ら作り上げた「メダンの家」の外へと導かれたのである。

おわりに

これまで、ゾラの実人生における住環境の変化が、40年におよぶ創作活動の展開と呼応していることを見てきた。そして、『ルーゴン=マッカール叢書』の著者と「メダンの家」という居住空間が、互いに不可分な存在として演出されていたことが確認できた。ゾラの死後1906年、アレクサンドリーヌは、ジャンヌの二人の子ども、ドゥニーズとジャックにゾラ姓を名乗ることを許した。1908年にゾラがバンテオンに移葬されたセレモニーには、初めて公にジャンヌと並んで姿を見せた。パリやメダンの家財を売却することを余儀なくされたものの、メダンの家を保存するため「ゾラ財団」に貢献したのもアレクサンドリーヌである。そして、彼女の死後に「ゾラ記念館」設立に向けて尽力し、私的な書簡や資料の公開を許可したのは、ドゥニーズ・ル・ブロン=ゾラであった。こうして、2つに割かれた私生活は、「メダンの主」の死後に結びあわせられ、文学的記憶を継承する場として21世紀まで存続することになったのである。